

## 平和をここから

坂元中学校 一年 渡邊 怜衣

日本は今年で戦後七十年を迎えました。ニュースで毎日のように戦争を体験した人たちの話が流れます。戦争という誰かが広島や長崎のことばかりが頭に浮かんでくると思いますが。でも今回私は、鹿児島島の戦災と復興に目を向けました。きっかけはニュースももちろんありますが、「市民のひろば」という鹿児島島の情報紙で市長の森さんのお話を読んで、私たちが暮らすこの鹿児島でも悲惨な状況であったことがわかりました。鹿児島という特攻隊のことが有名ですが特攻は戦争に行った人の話の主になっていて、残された女性や子供たちのことはほとんどわかりません。私自身も何も知りませんでした。この夏、中央公民館で「ヒロシマ原爆展」と「鹿児島市の戦災と復興資料・写真展」を行っていることを知り見学に行きました。

まず目に入ったのは「ヒロシマ原爆展」でした。どうして広島や長崎に原爆が落とされたのか疑問に思っていました。その説は色々ありますが、私が調べたものによると八月二日に投下する命令が出て、優先順位が広島、小倉、長崎だったそうです。そして、八月六日、午前八時十五分に広島に原爆投下。八月九日に投下命令。優先順位は小倉、長崎。でも実際は長崎に投下されました。当時小倉上空には前日の八月八日に小倉に隣接する八幡が空襲を受けた際に発生したと思われる煙が立ち込めており投下目標の目視が難しかったため急きよ変更されたという事でした。広島は原爆によって多くの人々が変わり果てた姿になりました。原爆による影響は主に三つあり、熱線、爆風、放射線でした。熱線は放射線によって焼かれた人々は重度のやけどを負い、多くの人々が亡くなり、爆風によって人々は吹き飛ばされ、失神した人、飛散物で負傷した人、

倒壊した建物の下敷きになって圧死した人が相次ぎました。放射線を体の外から浴びる事によって起こる外部被爆、放射性物質が食事や呼吸などによって体内に入る内部被爆などがありました。そのどちらもさまざまな障害を引き起こし、被爆者たちを苦しめました。私は広島や長崎に行ったことがないので、本当の悲惨さは分かりませんが鹿児島市の戦災を調べていくうちに知らなかった事をたくさん知る事ができました。昭和二十年三月十八日から八月六日を最後に計八回にわたって空襲を受けました。市街地の九割以上焼失し、死者約八千人を数えました。特に六月十七日夜半の大空襲では一夜にして二千人余り犠牲になりました。復興資料を寄贈した人の話の中に当時は空襲警報があると外に明かりがもれないように電球にカバーを着け、その下で家族と一緒に肩を組んで背中を低くし、息もこらし、じつと音がしなくなるまで待っていたという話がありました。また、別の人の話では空襲警報が鳴るたびに防空壕に避難してその際、飛行機の音に気づき机の下に身をかくし見上げると、低空飛行している飛行機の中の人が見え、怖かった思いを今でも忘れられないという話がありました。八月十五日は終戦記念日ですが今は八月十五日を知らない人が少なくありません。戦争といってもテレビの映像や本などでしか知ることができません。理解したつもりでいても本当の意味では理解できていなかったと思います。

今回、復興資料を寄贈して下さった方々のその誰もが戦争の悲惨さ、平和の尊さについて書いてありました。戦争は人と人との殺し合い、一つも良い事はありません。悲惨な戦争は二度と起こさなければなりません。そのために私たちができること、絶対に戦争を起こさないよう全ての国の人が仲良く、平和で助け合って生きていくこと、それが私たちに課せられた課題ではないでしょうか。